



課程博士学生のキャリアパス

東京海洋大学助教；
大学院海洋科学技術研究科
海洋工学系海洋電子機械工学部門
機械材料研究室

盛田元彰

1. はじめに

私は横浜国立大学大学院工学府で学び、2012年3月に博士の学位を取得しました。同年4月より東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科に助教として着任し、現在、船舶や海洋構造物に関連した金属材料の研究に従事しています。現職を得るにあたっては、博士課程3年次に就職活動を行いました。そこで気付いたことがあります。それは、学部学生の就職活動とは異なり、博士学生の就職活動に関するいわゆるハウツー本は見当たらないことです。その一方で、よく目にしたのは博士の就職が難しいことを指摘する情報でした。ニュースや本、インターネットの情報は博士課程後期への進学を勧めていません。本来、自らの将来は、自らが責任を持って考え、自ら行動することによって開けるものではありませんが、より多くの大学院生や学部生に課程博士学生のキャリアパスを早期に認知させ、かつその優位性を知らしめることは重要です。研究室等の身近な環境においてその実像を見聞きする機会が限られている状況では、ほとんどの学生が博士課程後期への進学とその将来に不安を抱くことにつながっていると思います。

先日、博士課程在籍時に共にシンポジウムを開催した博士の1人に会いました。彼は企業に就職し、即戦力として活躍しています。彼は「今後、博士の学位を持っていることは不利ではなく武器になる」と断言し、私もこれに同意見です。この度、光栄なことに本稿を執筆する機会を頂きました。そこで、誠に僭越ながら、学位を取得したばかりの身である視点から、博士課程に進学しようとする学生の皆さんに向けて、課程博士学生のキャリアパスの設定について紹介させて頂き、微力ながら課程博士育成の一助になればと存じます。

2. キャリアパスの設定

私が選択できる職種が多くある中で大学への就職を希望した理由は、研究活動を通して未来の研究者を育成したいと考えたからです。博士課程進学当初からこの大きな目標があり

ました。しかし、就職活動に向けて自分から段階的な目標を設定することもなく、博士課程3年次を迎えてしまいました。すなわち、キャリアプランの設定はしていましたが、キャリアパスの設定ができていませんでした。それぞれの研究機関には採用する人物に求める要件が存在し、その要件を満足しなければ応募することができません。したがって、博士課程在籍時に自らのキャリアパスを設定し、研究機関の要件に沿った目的意識とそのスキルを高めることが重要です。

公募要項には求められる要件が記述されています。日本における公募に限ると、「あたりあ」の掲示板や科学技術振興機構が提供するインターネット求人サイト「JREC-IN」を用いればほとんど全ての公募を参照でき、公募要項には募集する専門分野、任期、資格ならびに提出する応募書類が記載されています。これらのうち重要な部分は提出する応募書類の部分です。応募する研究機関を大学とした場合、提出する書類は通常、(1)履歴書、(2)研究発表・論文リスト、(3)研究資金獲得状況、(4)研究概要、(5)着任後の研究と教育に関する抱負(各1000字程度)、(6)主要論文の別刷3~5本、(7)照会人1~2名の連絡先、の7つです。仮に上記の(1)~(7)の内容でポスドクや助教の要件を想像するならば、5本の論文を投稿し、学内外で研究資金を積極的に取得している人、また、研究と教育の双方に取組んでくれる人と読み取れます。最近では、それらに加えてTOEICまたはTOEFLのスコアや地域貢献に対する抱負の提出が求められる場合があります。すなわち、英語力や地域活性化の活動に対して情熱のある人が求められています。これらの要件を就職活動の時までに満足していなければ、応募を断念せざるを得ません。調べずにいた自らの責任になります。

上述した研究機関が求める要件は一朝一夕で満足できるものではなく、目標とするキャリアを意識しながら積み重ねていくことで達成できると思います。論文の投稿数は最も重要な因子であることはいまでもありませんが、例えば、外部資金取得の実績を作るには博士課程学生が獲得できる研究費や助成金に積極的に応募すればよく、TAや講義の仕事をする中で教育についての考えを1つでも持つことです。大切なことは一度自身の活躍の場を考え、キャリアパスを設定することであり、求められる人物像となるように日々鍛錬できれば納得のいく道へ進めると信じております。

3. 私のキャリアパス

私は早期にキャリアパスを考えて行動していたわけではありません。しかし、私は国際シンポジウムのsecretariatや地域高校の研究補助、および企業での講義等多くのことを博士課程在籍中に経験できました。それらの活動を通して国際交流や地域交流および活性化に対して自分の考えを持つことができ、また、講義させて頂いたことは1つの実績として自信を持ってました。梅澤先生と福富先生の配慮のおかげです。まだまだ理想の研究者には程遠いですが、日々、研究と教育に精進していく所存です。末筆ながら支えて下さった多くの皆様、今後とも宜しくお願い致します。

(2012年12月12日受理)

(連絡先：〒135-8533 東京都江東区越中島2-1-6)